

第一三講 「心ひかれ趣のある」言葉

★心惹く・・・感心が向く、懐かしい、好意を寄せる感じ

★趣がある・・・感動、風流心がある感じ

○心ひかれる類

なつかし(形)・・・心がひかれる、慕わしい、離れたくない、親しみやすい、懐かしい

ゆかし(形)・・・(心がひきつけられて)見たい・聞きたい・知りたい、懐かしい、

こころにくし(形)・・・心ひかれる、奥ゆかしい、恐るべきだ、不審だ

※妬ましく感じるほどに相手が優れているというイメージ

はづかし(形)・・・(こちらの気が引けるほど相手が)すばらしい、気が引ける

※入試で問われるのは「すばらしい」の意が多い。

○趣がある類

あはれ(感・形動・名)・・・(しみじみと)心が動かされる・美しい・情趣がある

つらい・寂しい・かわいそう・可愛い・見事だ

をかし(形)・・・おもしろい。趣がある、風情がある、すばらしい、かわいらしい

滑稽だ、おかしい

※「あはれ」と「をかし」は古典単語の中でも持つ意味の多い多義語なので訳に注意！

色好み(名)・・・恋愛の情趣や雰囲気を楽しめる人、風流・風雅な方面に関心理解がある人

心あり・・・思いやりがある、道理がわかる、情趣を理解する、趣や風情がある、下心ある

※「情けあり」もほぼ同意

Ex. うたてよろづになつかしからねど

――不快で全てにつけて慕わしい感じはしないけれど

ねびゆかむさま、ゆかしき人かなと

――大人になっていく様子を、見たい方だなあと

あさましくあはれにまもりゐたり

――驚きあきれ、しみじみと心をも動かされ見つめて座っていた

なつかし

御ころばへいとなつかしう

―ご性質がたいそう親しみやすく

ゆかし

(源氏物語が)いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに

―(源氏物語のことが)たいそうじれったく、読みたいと思われるので

ころにくし

いとどこかにころにくしく住みなし給へり

―とてもゆったりと奥ゆかしく住んでいらっしやる

定めて討手向けられ候はんずらん、ころにくしうも候はず

―きつと討手の兵をお寄こしになるでしょう。(しかし)恐れるほどでもございません

ころにくし。重き物を軽う見せたるは

―どうも怪しい。重い物を軽く見せかけているのは

はづかし

はづかしき人の、歌の本末問ひたるに

―立派な人が、(私に)和歌の上の句や下の句をたずねたときに

慣れぬる人も、ほど経て見るは、はづかしからぬかは

―慣れ親しんだ人でも、時が経ってから会うと、気兼ねを感じないことがあるか(いや感じるに違いない)

※「かは」と「やは」は反語の係助詞!

あはれ

野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ

―秋の台風の翌日こそ、たいそうしみじみとした情趣があり、風情があるものだ

※「こそ」↓「をかしけれ」で係り結び(已然)

悲しきをりなれば、いみじくあはれなりと聞く

―悲しいときであるので、ひどく悲しいことだと聞く

得ずなりぬるこそいとあはれなれ

―手にいれないままになった者はひどく気の毒である

もの心ぼそげに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして

―なんとなく心細い様子で実家に下がることが多いのを、いっそうもの足りなくいとしいものにお思いになって

御子にもいとあはれなる句を作り給へるを

―若宮(光源氏)も実に見事な詩句をお作りになったので

をかし

万のことも始め終はりこそをかしけれ

―全てのことも始めと終わりが趣深いものだ

心ばへなどもをかしかりければ

―気立てなどもすばらしかったので

中将をかしきを念じて

―中将はおかしいのを我慢して

色好み

いみじう気色だつ色好みどもに

―はなはだしく気取っている好き者らと

賢き色好み出でて、盛りにもてはやし

―すぐれた風流人がでて盛んにほめたたえ

※現代語の「色好み」は道徳的非難を含むが、平安時代ではただの情事をこえた恋の情趣を尊ぶという美的理念でもあった。

心有り

三輪山を しかも隠すか 雲だにも心あらなも 隠さふべしや

―三輪山をそんなに隠すのか。せめて雲だけでも(思いやりの)心があつてほしい。(三輪山を)隠し続けることがあつてよいものか